

D 恐竜 inosaurs

恐竜博物館ニュース

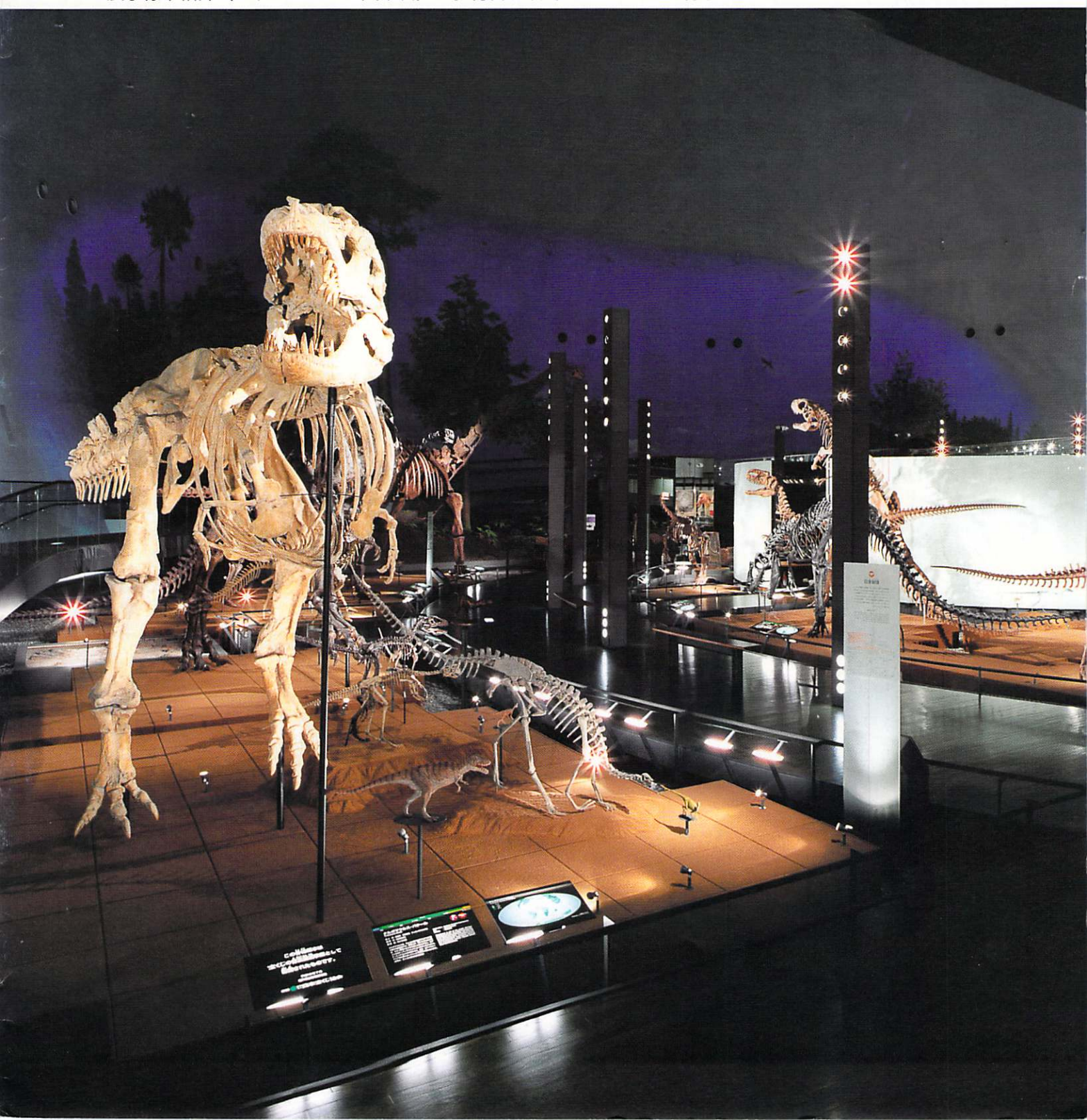
創刊号

2000.10.20

福井県立恐竜博物館

恐竜博物館オープン! 特集:世界の恐竜研究者が集う

目次 ▼ 恐竜博物館オープン…2-3 ▼ 特集:世界の恐竜研究者が集う…4-5 ▼ 研究ノート/博物館バックヤード…6
▼ 展示標本紹介(ノトサウルス・貨幣石)/教育普及活動…7 ▼ 行事案内/ダイノメイト/編集後記…8



恐竜博物館オープン!

福井県立恐竜博物館館長

濱田 隆士

日本の博物館界はいま激動の時代に入りました。動物園類は野外パーク化の道を走り、水族館は巨大水槽の出現で魚族と人間との関係はどちらが見る方でどっちが見られる側かわからなくなりました。植物園は名札をたどる学習の場から環境理解とガーデニング・ブームとの結合の場になっているようです。考古・歴史博物館は目白押しの発掘成果とそれらをめぐる新解釈の台頭に追いまかれる現状です。

さて、狭義の博物館類と美術館類もまた目まぐるしい変貌の中に身を置いていることは間違いありません。アートは人類の智的進化がもたらした特異点ですから、いつの世も隆盛を誇っていますが、その絞り込みや建物・レイアウトの先進性には本当に目を見張るものがあり、多様性が一層進んできました。写真だけでなくCGを含む新しいビジュアル世界の参入がますます輪をかけることでしょう。

博物館のうち科学、科学技術、工学、産業博物館では、最先端の宇宙工学から生命科学まで幅広いジャンルが展開されると共に、参加型～ハンズ・オン思考の施設も急速にふえ、かつてない賑やかな場となっています。それに比べると、自然史系の博物館は少し毛色が変わり、広く生活と結びついたエデュテインメント志向から地域社会・生涯学習に目を向けた活動が多くなってきました。

その一方で、自然界をグローバルな視点で理解・体験する方向が模索され、さまざまな新局面が開拓されています。レプリカ技術の変革が大きな力になっていることもあるでしょう。恐竜博物館は、こうした流れの中にあって、また一段とフレッシュな博物館展開を見せます。



名前に背くことのない35体の復元骨格標本～生体・生態標本のオンパレードは世界にも自慢できるものです。高さ約40mの卵形ドームをフルに活用した大ジオラマ、古植生～古環境復元は、恐竜を化石の範囲で理解するのではなく、生きものとしてのライブな在り方として理屈なしに体感できる仕掛けに進歩しています。

恐竜は世にも不思議な生物です。系統的には実に1億数千万年の長期地上世界に君臨したにもかかわらず、知られているのが1,000種程度であって、昆虫等の進化上の大発展とは全く異なったパターンを示すからです。巨大～超巨大恐竜発掘のニュースが飛び交うと思えば、ミニ恐竜、さらには卵と幼竜の化石の発見ラッシュ等々、ますます謎がふえそうです。最近取沙汰されている鳥一恐竜の系統関係の話題はその最先端といえるでしょう。

福井県立恐竜博物館は、すぐ近くの日本一の恐竜化石産地を控え、わが国のみならずアジアでの恐竜情報・研究センターの役を担うべく、勝山の地に“恐竜王国”を自負しながら7月14日にオープンしました。どうぞよろしく!!

喜びと期待がひろがった開館記念行事

平成12年7月14日、福井県警察音楽隊のファンファーレが奥越の空にこだまする中、福井県立恐竜博物館の開館記念式典が始まりました。式典には200人余りの関係者が集まり、栗田幸雄福井県知事ら10名の方々によるテープカットで一気に館内へ入りました。

開館記念式では、県知事の式辞、美濃美雄福井県議会議長をはじめ5名の方々の来賓祝辞があり、来賓の方々が紹介されました。

特に、世界的な恐竜研究者であるカナダのロイヤル・ティレル古生物博物館のフィリップ・カーリー研究部長、エバ・コッペラス博士、モンゴル科学アカデミー古生物学研究所のリンチェン・バルスbold所長、中国科学院古脊椎動物古人類研究所の董枝明教授、アメリカテキサス州サザンメソジスト大学のルイス・ジェイコブス教授、大韓民国の李隆濤博士に出席いただけたことは、恐竜博物館の開館にとって最高の記念となりました。勝山市立村岡小学校の矢戸知子さんと金田

博史さんに恐竜博物館への抱負や期待について発表していただき、関係者への贈呈状の授与、感謝状の贈呈、館長挨拶と続き、式が終了しました。その後は展示の内覧と祝賀会が行なわれ、関係者らはそれぞれに喜びと期待を語っていました。(後藤道治)



福井県立恐竜博物館について

福井県立恐竜博物館は、卵のような形に見えるドームからなるホール棟とウィング棟から構成されています。元の地形をできるだけ活かした造りの、地上3階、地下1階の建物です。

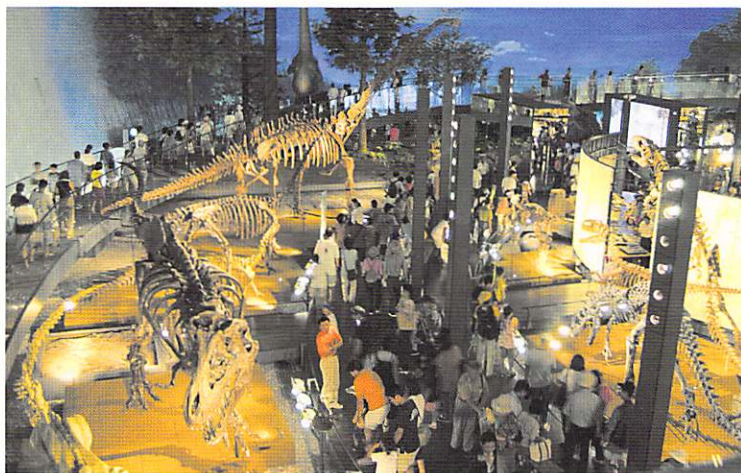
3階の入口から博物館に入り、トップライトの下の吹き抜けをエスカレーターで地下1階まで一気に降りていきます。恐竜時代までの岩石や化石が並ぶダイノストリートを通ると、恐竜の化石が埋まっているボーンベッドが見えてきます。階段を上がると、恐竜の世界が目の前に広がります。1階は、35体の恐竜の全身骨格や福井県勝山市産の恐竜、原寸大で恐竜時代を再現したジオラマなどがある「恐竜の世界」ゾーンと、恐竜や化石の研究の背景となる地層や岩石を扱った「地球の科学」ゾーンからなります。ホール内に設置された、恐竜の骨格をいろいろな方向から眺められる、長いスロープを上がっていくと、2階は、生命の誕生から人類の出現までを時間の流れに沿って展示した「生命の歴史」ゾーンになります。

ウィング棟の吹き抜けの周辺には、化石について楽しみながら学習できるダイノラボ（1階・2階）、恐竜絵画や模型を展示したダイノギャラリー（1階）、恐竜や地球についての映像を見たり、博物館や恐竜を調べたりできる視聴覚ライブラリー（2階）があります。化石クリーニング室（1階・2階）では実際の作業風景を見ることができます。3階東側には、恐竜などについての図書が閲覧できるダイ

ノライブラリーや特別展示室があり、入口周辺にはミュージアムショップやレストランなどもあります。各種行事に利用する講堂や研修室などはウィング棟の西側に集められています。

福井県立恐竜博物館は、平成22年7月14日に開館し、15、16日に無料公開を行いました。7月20日から9月17日までは、「恐竜エキスポふくい2000」の中で63万6899名もの多数の来館者を迎えることができました。エキスポ終了後、周辺の整備などのため一時閉館し、10月7日に再オープンしました。

（佐野晋一）



▲エキスポ期間中の恐竜ホール



▲恐竜博物館外観：恐竜ホール（左側）、ウィング棟（右側）



世界の恐竜

座談

今年7月14日に福井県立恐竜博物館がオープンした際、海外から6人の古生物研究者に開館式典にご参りいただきました。出席者は、恐竜学や周辺関連分野の権威であるフィリップ・カーリー博士、ルイス・ジェイコブス博士、董枝明博士、リンチェン・バルスボルド博士、李隆濫博士、エバ・コッペラス博士。彼らに当博物館に対する期待と今後の活動に対するアドバイスを座談会形式で伺いました。

——今日は私どもの博物館開館式典に遠いところからご出席いただき、誠にありがとうございます。さて、本日の集いで最初にお聞きしたい質問です。我々の博物館をどう思われますか？

カーリー まずは、開館おめでとうございます。そして御苦勞様でした。ロイヤル・ティレル古生物博物館としても福井の恐竜博物館については、大変喜ばしいことと感じています。小さな博物館は世界にもたくさんありますが、この博物館は、規模も大きく、研究機関という非常に重要な側面をもっています。研究施設として利用できるものとして人々はここに集まり、世界の他の地域の人々が交流できます。情報センターとしてのこの博物館の可能性は大きく、展示ばかりではなく、研究を推進し、その結果を展示にフィードバックさせることができます。

バルスボルド 大変すばらしいものだと思います。この博物館には優秀なベテランおよび若手研究者もいますし、将来がとても楽しみです。

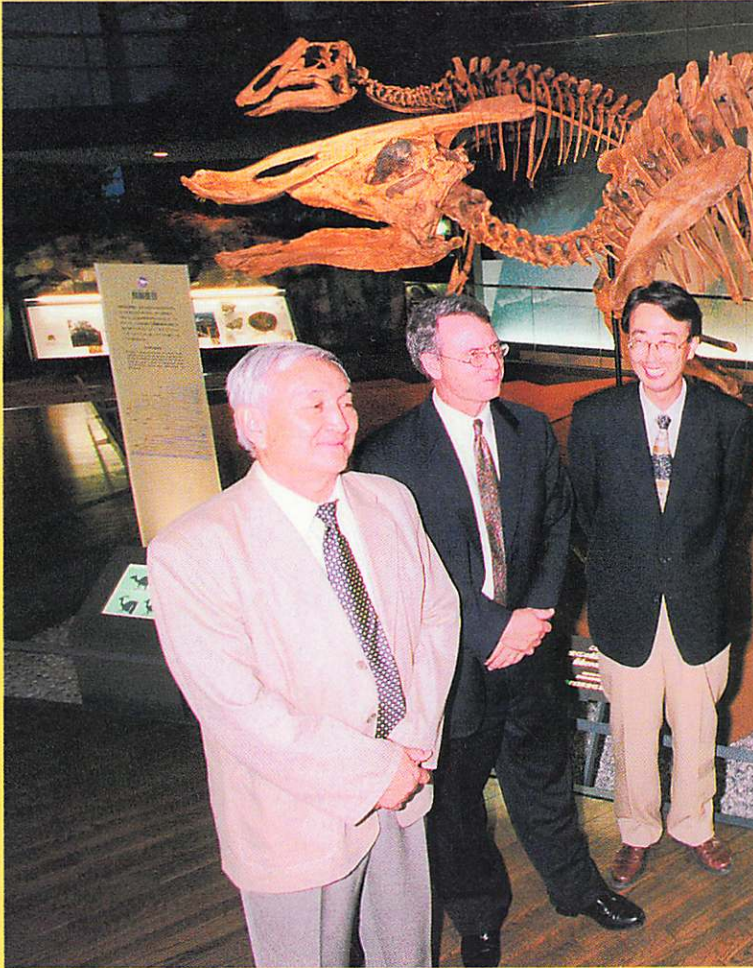
ジェイコブス ここはさまざまな化石産地に近く、立地条件も良い大変興味深い館だと思います。今日は記念すべき開館日です。この博物館建設計画を見ると、科学的にしっかりした基盤を持ち、教育にも力を注ぐようです。とてもすばらしいことだと思います。世界中から賞賛を受けるに値する博物館だということを、古脊椎動物学会の委員会役員として申し上げたいと思います。開館してこの先、施設の利用は世界の人々皆に対する財産となるでしょう。本当におめでとうございます。

李 世界の博物館計画にも大きな一歩だと信じます。韓国にもこのようなすばらしい博物館が望まれます。日本の恐竜は中国、韓国を含めた東アジアと近い関係にあり、共に研究を進めていく必要性を感じます。日本の恐竜化石は、比較的狭い限られた地域でしか出ていませんが、発掘方法は効果的かつ大規模で韓国と大変違ってきます。まだ韓国では日本と比べて、立ち遅れているところがありますが、現在、韓国政府は博物館の建設に興味を示しています。是非ここを参考にしたいと思います。この博物館は世界で最も良い施設の一つに数えることができるでしょう。

全員 恐竜博物館の在り方と歴史の新たな一章といえるのではないのでしょうか。

コッペラス 夫フィリップ（カーリー博士）は毎月のように日本やアジア各国の若い学生から手紙をもらっていますが、今後このようなすばらしい施設があることを知らせることができます。（もちろんカナダでもよいのですが）彼等彼女等はここが待ち望まれていたものであることを知るでしょう。

——博物館は完成したわけですが、大事なのは今後どのように機能していくべきかということです。研究はもとより、教育という面でも力を発揮していくべきだと思いますが、この一地方博物館は何を発信すべきで、また何を求められていくでしょうか。



董 第一点は、ここは化石発掘現場も近いし、周りが自然に囲まれています。自然の中で子供たちが恐竜を発見し、それに親しむ機会をもてるのは重要なことだと思います。二点目は、手取層群の白亜紀前期の恐竜標本という資源でしょう。モンゴルを含めた東アジアの白亜紀前期の恐竜、そして鳥、昆虫など様々な化石を比較する上で重要です。

カーリー そうですね。董教授が言われたように、研究と教育という二つの点を結びつける上で、化石発掘の現場が近いのは非常にいいですね。最近の傾向ですが、研究センターは必ずしも

研究者が集う

大都市にあるわけではなく、小さな街からの発信が多くなってきています。フィールドが近くにあるなど便利な点もあり、大きな都市である必要はないのです。今や世界は一つにつながり狭くなっているため、どこにいるかを含めて都市の大小はあまり関係なくなっています。ティレル博物館もバッドランドの真中にあり、東京やニューヨークのような都会にある博物館とは違ってきます。

また、特徴的な何かを持っているのは強みです。カナダではほとんどが白亜紀後期のものが多いので、福井の勝山で見られる白亜紀前期の標本はカナダを含めた他の地域の人たちにとって重要です。



当館恐竜ホールにて撮影
(写真：福井新聞社提供)

話は少しそれるかもしれませんが、メディアを通じて博物館の存在を広めることも重要でしょう。ティレルなどは、展示の内容は質・量ともに世界でも有数で、観光スポットとしてもよく機能しています。最近までドラムヘラーなどの小さな町は観光客の数など数えるほどしかいなかったのに、博物館ができた後、数年経った頃にはその数は一気に伸び、経済効果はすごいものです。十年も経った今、恐竜は数百万ドルを稼ぎ出す産業に成長しています。我々はどんどんそれらを拡大していくことができるのです。ティレルでは優れたコレクションがあるので、

大勢の研究者や学生達が集まります。本を書く人もいますし、特に宣伝というものを意識せずとも、研究が良い宣伝になっています。それは経済効果ももたらし自分達にも返ってくるのです。一つの効果的な宣伝手段としては、開館間もなく国際シンポジウムを開くことです。ティレル博物館では、開館後すぐに三つの国際会議を開催しました。そうすれば、人々は早いうちからこの博物館がどういうものであるか分かりますからね。そういう意味では、今回これだけ人が集まったのはよいことだと思います。

ジェイコブス 博物館の姿勢ないし目標を四方八方に手を伸ばすのではなく、しっかり見据えてやっていくことも大事でしょう。そのうえで、地方の独自性を出していけばいいのです。地方というのはある意味強みでもあるのです。というのも、ある地域というのはユニークなもので、そのユニークさを求めて、人々がやって来る。宣伝という面で、一つの可能性としては、ティレルとこの博物館をweb(ホームページ)で結ぶということが考えられます。ティレルはすでに恐竜好きの人々を市場として開拓していますし、そういう人々が、この博物館の情報を得ることで、ここまでやって来るかもしれません。

もう一つの点は、とかく研究者というのは、一般の人から何をやっているのか分かりにくい面があるので、そういう人々をわくわくさせるような、新しい知識を生み出し、情報を発信し続けていくことが重要でしょう。

カリ そういう知識を展示に反映させ、持続的に発展させていくということが大事ですね。

バルスボルド 次の世代を育てることも重要で、そういう意味でも情報を充実させるのはいいことです。世界的に恐竜に対する興味は高まっていて、アメリカ、カナダ、モンゴルでもそうです。我が国の首相が我々の博物館にきて演説するなど十年前のモンゴルでは考えられなかったことです。

——さてそろそろ時間も迫ってまいりましたので座談会を締めくくりたいと思います。今日は、多くのアドバイスをいただきありがとうございました。我々の博物館は、人を育て、国際的な活動をしていきたいと思っています。そのためには、先生方とのより強い絆が必要です。また、将来的には我々が貢献できる何かが出てくることと思います。そのようなことを通じて、より関係が深まっていくことができればよいと思います。

(一島啓人、小林快次)

左から リンチェン・バルスボルド博士：モンゴル科学アカデミー古生物学研究所
ルイス・ジェイコブス博士：サザンメソジスト大学（アメリカ）
李隆濤博士：ヨンセイ大学（韓国）
エバ・コッペラス博士：ロイヤル・ティレル古生物学博物館（カナダ）
フィリップ・カリ博士：ロイヤル・ティレル古生物学博物館（カナダ）
董枝明博士：中国科学院古脊椎動物古人類研究所

恐竜は、一般的に肉食恐竜と草食恐竜に分けられる場合があります。歯の形やその他の特徴から、明らかに肉食または草食と判断できる恐竜がほとんどですが、中には容易に判断できないものもあります。その恐竜の一つとして、オルニトミムス類があげられます。オルニトミムス類は、獣脚類に属し、スリムな体や長い足や首を持ち外見がダチョウに似ているため、別名「ダチョウ型恐竜」としても知られています。1996年から1998年の間に日本・中国・モンゴル国の共同発掘隊により、モンゴル高原恐竜発掘調査が行われました。1997年には、中国・内モンゴル自治区からオルニトミムス類の骨格(写真1)が多数発掘され、肋骨の中から胃石(写真2)が発見されました。この胃石の発見によって、この恐竜が何を食べていたかが明らかになりました。

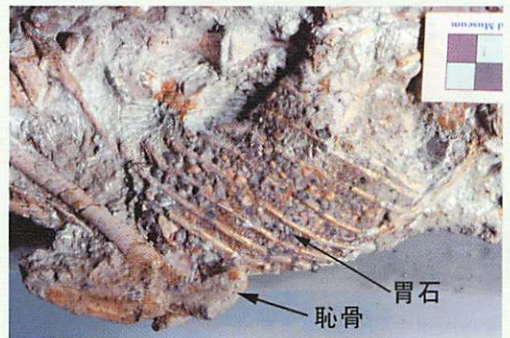
現生の動物では、鳥やワニも胃石を持っており、絶滅した動物の中にも首長竜やその他の草食恐竜(竜脚類やブシッコサウルス)が胃石を持っていた事が知られています。それぞれの動物に見られる胃石の機能は異なり、それらの機能として、①水中に長時間いられるための“おもり”、②不足しているミネラル(主にカルシウム)の補給、③消化を助けるため、の



▲写真1：中国・内モンゴルで発見されたオルニトミムス類の全身骨格化石

主に3つをあげることができます。オルニトミムス類は陸生の動物であるため“おもり”としての機能は否定され、胃石

にカルシウムが含まれた鉱物が非常に少なく、ミネラルの補給には使われなかったと考えられました。そのため、オルニトミムス類の胃石は、鳥の胃石の



▲写真2：肋骨内に保存されている胃石

様に消化に深く関係しているのではないかと推測されました。胃石の特徴を調べたところ、オルニトミムス類の骨格1体における胃石の数は千を越え、このように多くの胃石を持った鳥は全て草食であることから、この恐竜も草食性であったと考えられたのです。しかし、胃石の大きさの平均をとると体重に対して大きさが小さいため、オルニトミムスの胃は、現生の鳥が持つ“砂ぎも”とは違う構造を持っていたと思われる。

「肉食性」と「草食性」というものの“進化”を考えた時、「草食性」は「肉食性」よりも進化的です。また、鳥は、獣脚類恐竜のあるグループから進化したものと現在考えられています。もしそうであるならば、獣脚類恐竜の進化の過程で、「草食性」への適応が、オルニトミムス類と鳥類で独立して現れたと考えられます。近年、このように、獣脚類の中で鳥類にしか存在しないと考えられていた特徴が、その他の獣脚類に多く見られるようになり、鳥と獣脚類恐竜が近縁である事が確実視され、その反面、“鳥類”の定義、または鳥類の祖先はどの獣脚類恐竜なのかという事が議論されています。

(小林次次)

博物館バックヤード 収蔵庫

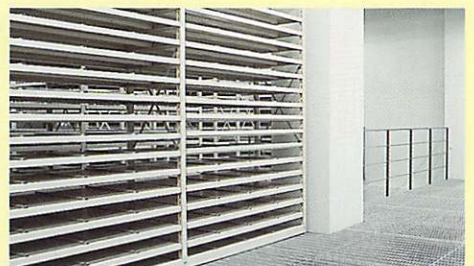
「博物館」というと、陳列されている展示物ばかりに目を奪われがちですが、これらの展示物は実は博物館の収蔵資料の一部にすぎません。博物館は、資料の展示を行うのと同時に、普及・教育活動や研究活動のため常に様々な資料を収集し、保管・管理を行っています。こういった資料を保管する場所「収蔵庫」は、博物館活動に最も重要な設備で、博物館の裏の顔とも言えるのです。

恐竜博物館には、卵形の展示ホールの付け根から東西にのびる、ウィング棟と呼ばれる建物があります。収蔵庫は、このうち東ウィングの1、2階の大部分を占めていて、保管する標本の性質によって一般収蔵庫と特別収蔵庫とに分けられています。

一般収蔵庫は、床面積約1,000㎡のスペースを上下に二分した巨大な空間で、作りつけの棚が整然と並び、恐竜の骨化石を始めとする様々な標本が納められています。その一部には発掘現場で採集した足跡化石など、巨大な標本を保管するための特殊な収納棚もあります(写真下)。人の手で運ぶことのできない標本は、フォークリフトを使ってこの棚に納められます。さらに、一般収蔵庫には学術論文等に利用した「基準標本」を保管するため、耐震性のキャビネットも設置しています。

特別収蔵庫は約50㎡程の小さなスペースです。温度や湿度の変化に敏感な化石や美術品などの保管を行っています。みなさんは博物館のギャラリーをご覧になりましたか？このギャラリーには世界の著名な作家の手による絵や彫刻などを展示していますが、ここに展示予定の作品類が現在この特別収蔵庫に納められています。

(矢部 淳)



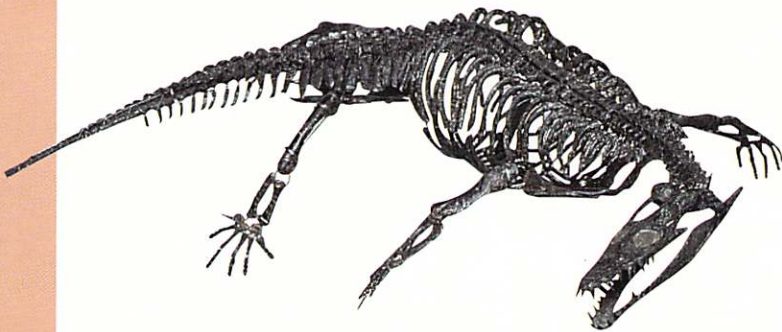
展示標本紹介

ノトサウルス

(ノトサウルスの一種：Nothosaurus sp.)

ノトサウルスは中生代三畳紀後期に現れて、その時代の終わりとともに絶滅した中型の海生爬虫類です。ずっと後の時代（白亜紀）の首長竜と姿が似ていますが、ノトサウルスが首長竜の先祖かどうかははっきりしません。ノトサウルスは海に住んでいた爬虫類ですが、手足の構造から、陸上で過ごす時間が長かったのではないかと考えられています。

ところで、中生代の爬虫類は、すべて「恐竜」と考えられがちですが、ノトサウルスのように海に住んでいた爬虫類は恐竜ではありません。けれども、ノトサウルスの生きていた三畳紀後期は、丁度陸上に恐竜が現れた頃です。ノトサウルスは、最初の恐竜と同じ時代の海に暮らしていたのです。この標本は実物ですが、このように立体的に組み上げられている実物のノトサウルスは世界的にも珍しい大変貴重なものです。(一鳥啓人)



貨幣石

(ヌムリテス・ボニネンシス：Nummulites boninensis)

ヌムリテス（貨幣石）は有孔虫という原生生物の仲間です。円盤状で貨幣（硬貨）に似ているので「貨幣石」と呼ばれます。新生代古第三紀で絶滅しましたが、古第三紀の時代を細かく分ける示準化石として重要な化石です。またヌムリテスは、現在も暖かい海にすんでいる大型有孔虫（高等有孔虫）とも呼ばれるものの仲間、ヌムリテスも暖かかった海の環境を示す証拠とされます。

ヌムリテスは日本では小笠原諸島の母島、熊本県の天草、沖縄県から産出しています。恐竜博物館の2階「生命の歴史」ゾーン、哺乳類時代の海のコーナーには母島と天草からのヌムリテスが展示されています。母島のヌムリテス・ボニネンシス（写真）は化石の密集した大きな石灰岩のブロックで、数cmのヌムリテスがびっしりと入っているのを見ることができます。(野田芳和)



教育普及活動

濱田隆士館長による記念講演会

演題：「福井県立恐竜博物館の目指すもの」

日時：10月7日(土) 14:00～15:30

「福井県立恐竜博物館の目指すもの—これからの恐竜博物館—」と題した講演会を再オープンの日で開催しました。充実した展示内容、世界へと広がる古生物研究の活動、恐竜博物館の果たす役割と課題などについて、館長のこれまでの経験をふまえながらの内容に、155名の参加者は魅了されていました。また、質疑応答では、展示方法やこれからの博物館活動などについての質問があり、恐竜博物館に対する関心や活動への期待の高さが伺えました。



こども自然教室

日時：10月8日(日) 13:30～15:30

勝山市北谷の恐竜化石発掘現場において、小学4年生から中学3年生を対象とした「こども自然教室」を実施したところ、香川県や大阪府、京都府など県外の参加者12名をふくめた35名の参加者がありました。館長をはじめ博物館スタッフによる恐竜教室のあと、化石発掘体験を行い、恐竜が生活していた当時の植物化石や貝化石などを採集しました。子どもたちは、恐竜化石が発掘された地層を実際に見れるとあって、この日が来るのをとても楽しみにしていたようです。終了後、博物館で待っていた親に自慢気に採集した化石を見せていました。(宮田和周)



行事案内 (2000年10月～2001年3月)

所定の方法にて、行事名・住所・氏名・電話番号・年齢を、博物館までご連絡ください。
開催日の一か月前から受付開始で、定員に達し次第、締め切らせていただきます。

講演会

講堂にて 対象：一般（※申し込み不要です）

■福井県立恐竜博物館の目指すもの
日時／10月7日(土) 14:00～15:30
講師／濱田隆士(当館館長)

■最新恐竜学
日時／3月4日(日) 14:00～15:30
講師／平山 廉(帝京平成大学助教授)

博物館セミナー 基礎コース 「地球生物の進化史」

研修室にて 対象：一般 申込：電話、FAX、E-mailにて

■①生物進化の背景にある大陸の移動
日時／10月29日(日) 14:00～15:30
講師／廣岡公夫(富山大学理学部長)

■②海の無脊椎動物
日時／11月12日(日) 14:00～15:30
講師／野田芳和(当館職員)

■③爬虫類の誕生と進化
日時／12月10日(日) 14:00～15:30
講師／小林快次(当館職員)

■④哺乳類の誕生
日時／1月14日(日) 14:00～15:30
講師／宮田和周(当館職員)

■⑤恐竜の誕生と繁栄
日時／2月25日(土) 14:00～15:30
講師／東 洋一(当館職員)

■⑥環境と森林の変遷
日時／3月18日(日) 14:00～15:30
講師／寺田和雄(当館職員)

地学指導者実技講座

実習室にて 対象：教師など 20名
申込：往復ハガキ、E-mailにて

■博物館学習の楽しみ方・実習①
日時／11月25日(土) 14:00～15:30
担当者／小島敏弘(当館職員)

■博物館の楽しみ方・実習②
日時／2月18日(日) 14:00～15:30
担当者／後藤道治(当館職員)

野外観察会

対象：一般 40名 申込：往復ハガキ、E-mailにて

■富山県の恐竜産地を探訪する
期日／11月3日(金・祝日)
内容／化石発掘地の地層や地質について学習する
行先／富山県大山町恐竜化石発掘現場、カルデラ博物館ほか

コンピュータ教室

実習室にて 対象：幼児～小3親子 20組
申込：往復ハガキ、E-mailにて

■コンピュータで恐竜をかいてみよう！
日時／11月5日(日) 13:30～15:30
担当者／千秋利弘(当館職員)

恐竜ふれあい教室

実習室にて 対象：幼児～小3親子 40組
申込：往復ハガキ、E-mailにて

■恐竜画教室
日時／12月3日(日) 13:30～15:30
講師／山本 匠(恐竜画家)
■恐竜をつくろう
日時／3月20日(火・祝日) 13:30～15:30
講師／荒木一成(恐竜造形家)

こども自然教室

対象：小4～中3 40名 申込：往復ハガキ、E-mailにて

■恐竜発掘現場にて発掘体験
日時／10月8日(日) 13:30～15:30
担当者／濱田隆士(当館館長)、当館職員
場所／恐竜化石発掘現場

■化石のレプリカ作成
日時／11月11日(土) 13:30～15:30
担当者／後藤道治(当館職員)

■化石を調べよう①
日時／1月13日(土) 13:30～15:30
担当者／矢部 淳(当館職員)

■化石を調べよう②
日時／2月24日(土) 13:30～15:30
担当者／一島啓人(当館職員)

■石を調べよう
日時／3月25日(日) 13:30～15:30
担当者／佐野晋一(当館職員)

福井県立恐竜博物館 展示解説書 販売中



福井県立恐竜博物館の展示解説書は、「恐竜の世界」「地球の科学」「生命の歴史」の三部構成で、それぞれ展示と対応した詳しい解説がなされています。子どもから大人まで楽しめ、かつ研究者にも適した、まさに恐竜博物館の魅力をあますところなく凝縮した一冊といえます。

この解説書は通信販売もいたしております。ぜひお買い求め下さい。

A4 208ページ
オールカラー
1,600円

注文方法

お求めの冊数、送付先住所を明記の上、代金と送料とを現金書留にて当館までご送付下さい。
送料は1冊の場合380円、2冊で520円、3冊では660円です。申し込み、問い合わせは恐竜博物館まで。

(千秋利弘)

ダイノメイト (後援会より)

福井恐竜博物館後援会は、平成12年4月に特定非営利活動法人(NPO)として設立されました。福井県立恐竜博物館内に事務所を置き、博物館活動の支援と一般への普及活動等の事業をおこなっています。

ただ今、福井県立恐竜博物館友の会(ダイノメイトというニックネームをつけています)の会員を募集しています。年会費は個人会員2,000円、家族会員3,500円です。現在で、個人会員198名、家族会員58名と順調に会員数は増加しています。北海道から沖縄まで日本各地にダイノメイト会員が誕生しました。これから会員の皆様の御期待に添えるように色々な企画を立てて参りたいと思っていますのでどうぞよろしく。

■申し込み先

〒911-8601 福井県勝山市村岡町寺尾51番地
福井県立恐竜博物館内
TEL&FAX 0779-88-8730

特定非営利活動法人 福井恐竜博物館後援会

編集後記

7月14日の開館以来、国内外から約70万人もの来館者がありました。来館者の方から「恐竜博物館の一番の見所はどれですか？」とよく質問されますが、その時は必ず「博物館のすべてです。」と答えています。なぜなら、展示してある標本のどれをとっても貴重で、素晴らしい標本であるからです。

福井県立恐竜博物館ニュース「Dinosaurs」の創刊号の発行にあたり、5人の世界的な研究者による座談会を特集しました。また、展示標本やバックヤード、学芸員の研究紹介等も企画しましたが、いかがでしたでしょうか？

これからもこの情報紙をとおして博物館のすべてを紹介していきたいと思っておりますので、次号をご期待ください。(小島敏弘)